

# マーク・トウェイン最後の旅行記『赤道に沿って』 の出版をめぐる経緯

飯 塚 英 一

(はじめに)

アメリカ文学を代表する作家マーク・トウェイン(1835-1910)には、旅行記に分類されるべき著作が六編ある。書かれた順にあげてゆくと、まず最初が『ハワイ通信』(Letters from Hawaii, 1947)で、これはトウェインがサンフランシスコで新聞記者をしていたときに、当時はまだサンドイッチ諸島と呼ばれていたハワイに四カ月間滞在して、サクラメントの『ユニオン』紙に書き送った通信記事である。書かれたのは1866年だが、本として出版されたのは作者の死後である。

つぎに書かれたのは、彼の出世作となった『地中海遊覧記』(The Innocents Abroad, 1869)で、1867年6月から11月まで、およそ五カ月半にわたって、地中海およびキリスト教の聖地パレスチナを回るツアーに参加したときの旅行記である。この作品はベストセラーになり、それによって一躍人気作家の仲間入りを果たしたという、トウェインにとっては記念すべき作品である。

そして、旅行記としては三番目に書かれたのが『西部放浪記』(Roughing It, 1872)である。トウェインの兄オリオン(1825-97)は1861年に知人の推薦で、リンカーン政権のもと、当時はまだ州に昇格していなかったネヴァダ準州の要職に抜擢されるのだが、この作品は兄といっしょにトウェインもネヴァダに行き、その後も西部にとどまって、サンフランシスコで新聞記者をしていた頃を回想して書いたものである。

その後、中央ヨーロッパ(ドイツ南部、スイス、イタリア北部)を主に徒歩で回ったときの旅行記『ヨーロッパ放浪記』(A Tramp Abroad, 1880)を書き、さらにトウェインがネヴァダに行く前に水先案内人をしていたミシシッピ川を再訪して、当時の回想を織りまぜて綴った『ミシシッピの生活』(Life on the Mississippi, 1883)を出版する。

そして、最後に書かれたのが、この小論で取りあげる『赤道に沿って』(Following the Equator, 1897)である。本来なら、六十歳を目前にして、ゆつたりと老後を過ごすはずのトウェインは、事業と投機に失敗して莫大な負債をかか

え、その返済のために世界一周の講演旅行に出ることになる。このときに訪れた国や地域での見聞をもとに『赤道に沿って』を書き、その印税と講演の出演料で借金を完済したという曰くをもつ、これもまたトウェインにとっては違った意味での記念すべき作品となった。

この小論では、トウェインの旅行記としては最後の作品になった『赤道に沿って』が、どのような背景から生まれたのか、またどのような性格をもつ作品なのかを明らかにしてみたい。

### (一) 印税をめぐるトラブル

トウェインは金遣いが荒く、一時は豪邸に住み、使用人を五、六人もかかえるような派手な暮らしをしていて、一見金銭には無頓着で豪放な人物といった印象をあたえる。だが、実際は金銭がからむとひじょうに疑い深くなり、容易なことでは相手の言うことを信じようとはしない。それがわざわざいして、何人かの親しい友人を失っている。その最たる例は1867年の聖地巡礼の旅で意気投合して、船室もいっしょなら、陸の上でもつねに行動をともにし、帰国後も親しく交際していたダニエル・スロート(通称ダン)との仲違いである。

トウェインは生涯にわたって、事業欲にとりつかれた人であるが、無数にと言ってよいほど、さまざまな事業の種を思いついたり、発明品を考案したりとその方面でも忙しかった。しかし、そのほとんどに失敗している。なかでも、唯一ましの発明がスクラップブックであった。あらかじめ糊をぬって乾燥させておいたところを水でぬらせば、切り抜いたものをそこに貼りつけられるという簡単な発明であったが、トウェインはこれを「マーク・トウェイン・スクラップブック」と命名して、当時ニューヨークで事業を営んでいたダンに製造と販売を任せたとある。これは売れて、トウェインに利益をもたらした。

しかし、当時自分の著作の出版に関して、出版元に印税をごまかされているのではないかという疑いにとりつかれていたトウェインは、このスクラップブックに関しても、自分の取り分はもっと多いのではないか、ダンが不当にもうけているのではないかと疑心暗鬼に陥ったのである。結局、それが発端で、ダンとは仲違いをしてしまい、その直後にダンは腸チフスで亡くなるのだが、トウェインはそれでもダンを許さず、晩年に書いた『マーク・トウェインの自伝』(The

Autobiography of Mark Twain, 1959)のなかでも、まだ非難している。

ダンとはそこに至るまでにいろいろと経緯があって、トウェインが一方的に悪いわけではない。ダンはそれまでに何度もトウェインに特許権の買い取りや投資の話を持ちかけ、トウェインに多額の出資をさせている。二人の仲が決裂する直前には、スクラップブックの事業にからめて、ダンはトウェインに自分の会社にも融資させている。トウェインも、乗りかかった船だからとでも思ったのか、何度か融資に応じた。詳細な数字は残されていないが、発明からあがる利益より融資につかった金額のほうが多かったはずである。

同じ頃、トウェインは自分の本の出版元であるアメリカン・パブリッシング社とも似たような経緯で関係を絶っている。同社のイライシャ・ブリスは、1867年に新聞に連載されていたトウェインの聖地巡礼の記事を読んで、本として出版することをすすめた人物で、「作家マーク・トウェイン」誕生に直接関与した人でもある。このときの本が前述した『地中海遊覧記』で、予約出版という形式ながらよく売れて、著者も出版社もかなりの利益を手に入れている。その後も、アメリカン・パブリッシング社からは『ヨーロッパ放浪記』まで、トウェインの作家活動の初期から中期にかかるあたりまでの作品をほぼすべて出し、例えば『トム・ソーヤーの冒険』(The Adventures of Tom Sawyer, 1876)などは当初思ったほどには売れなかったものの、どの本も確実に利益を産み出していた。しかし、このときもトウェインはもっと印税をもらえるはずだと思い、ブリスの死後、同社に掛け合っている。

このときの経緯を、トウェインは『自伝』のなかで書き、アメリカン・パブリッシング社との契約内容を詳述し、自分の正当性を強く訴えている。当然、『自伝』ではブリスは悪者で、トウェインは彼に辛辣な批判を浴びせている。しかし、これもトウェインの一方的な言い分で、しかも晩年を迎えた頃のものだから、あてにはならない。

トウェインはブリスとの間で交わしていた契約によって、他社から本を出すことはできなかったが、ブリスが1880年に亡くなると、アメリカン・パブリッシング社との関係を絶った。

## (二) オズグッド社からチャールズ・L・ウェブスター社へ

印税をめぐるトラブルにこりたトウェインは、その後は自分の思い通りに本を出そうという意図から、自分の都合に合わせてくれる出版業者を探すことにした。そこで彼はボストンの出版人ジェイムズ・R・オズグッドに白羽の矢をたて、『王子と乞食』(The Prince and the Pauper, 1881)、短編集『盗まれた白象』(The Stolen White Elephant, 1882)、『ミシシッピの生活』(1883)の三冊を、アメリカン・パブリッシング社と同じ予約出版という形式で出版させた。今度こそは納得できる額の印税を手に入れられるだろうと思ったのだが、誤算が生じた。オズグッドが予約出版に不慣れだったために経費がかかりすぎ、思っていたようには利益が上がりなかったのである。結局、オズグッドとも前記の三冊を出しただけで、手を切ってしまった。

そこで、いよいよ自分で出版社をはじめるとを思いつく。これが1884年のことであるが、この頃にはすでにトウェインは投機熱にとりつかれていて、さまざまな特許権を買い取ったり、発明に出資したり、株を買いあさったりしていた。一時は、株だけでも、二十三社の株を合わせて十五万株以上も保有していたという。<sup>1</sup> これらに関わる雑務をチャールズ・L・ウェブスターにやらせていた。この人物はトウェインの姉パミラの娘アニーの夫で、したがってトウェインには義理の甥にあたる。身内ということで信用したのだろうが、これがあとで災いの元となる。

このチャールズを取締役に据えて、トウェインは出版社を開業した。社名も、この甥の名をそのままつかって、チャールズ・L・ウェブスター社とした。同社からは、トウェイン自身の作品だけでも、『ハックルベリー・フィンの冒険』(Adeventures of Huckleberry Finn, 1885)や『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(A Connecticut Yankee in King Arthur's Court, 1889)など重要なものを出している。だが、ウェブスター社の刊行物で特筆すべきは、元大統領ユリシーズ・グラント(1822-85)の『回想記(上下二巻)』(Personal Memoirs, 1885)を出したことである。この本は、著者のグラントが執筆中に喉頭ガンに冒され、死の床で口述を続けたことから、人々の関心を呼び、けた違いの売れ行きを示した。発売前の時点で三十万セットの予約が入っていたという。これは、当時のアメリカの世帯数で言うと、三十軒に一軒が予約したことになるというから、たいへんな数字である。<sup>2</sup>

しかし、トウェインは、他社の企画であったこの本の出版を、何としても自社で請け負いたい一心で、グラント将軍に破格の印税を払うと約束してしまっていたので、ウェブスター社自体はそれほど利益を得ていない。もちろん、普通の本に比べれば多額の利益をあげたのだが、売れた部数に見合うほどの利益は得られなかったということである。グラントの遺族に支払った印税が合計で約四十万ドルという記録的な金額で、ウェブスター社の利益がその半分だったというから、印税と出版社の利益が逆転してしまった形である。<sup>3</sup>

それどころか、余分なおまけがついてしまった。この大成功でトウェインは躁状態になり、作品を書くことはそっちのけで、さらに出版業に傾斜して行き、さまざまな企画をたてはじめる。さらに、「自分の触れるものはすべて金に変わる」などと言って、ますます投機にものめり込んでしまうのである。甥のウェブスターも、『回想記』の成功は自分の力量によるものだと思いこんで自信過剰に陥り、出資者のトウェインの言うことを聞かなくなってしまったのである。これは最悪の結果である。宝くじの大当たりでその後の人生がくるってしまうようなものだろうか。このビギナーズ・ラックで、彼ら二人の人生も会社もおかしくなってしまった。

トウェインも、ウェブスターも、出版に関してはまったくの素人である。素人が自信過剰に陥れば、経営が破綻するのは目に見えている。当然、その後のウェブスター社の経営状態は悪化する一方で、グラント将軍の『回想記』の大成功から、わずか四、五年後には、トウェイン自身も妻のオリヴィアも、ウェブスター社に数万ドルもの大金を貸すような状況になってしまった。ウェブスターはそのような状態になる前に、すっかりやる気をなくしていて、ほとんど会社に出てこなくなっていた。その上、ウェブスターが採用した会計士が会社の金から二万五千ドルを横領していることが発覚し、確たる証拠はなかったが、ウェブスターもこの件に関与しているようであった。横領された金額の三分の一しか回収できず、トウェインが残りの金の行方を追求するように促しても、ウェブスターは応じなかったというのである。

トウェインは彼を辞めさせたいのだが、契約書を交わして経営を任せている以上、簡単には辞めさせることはできなかった。だが、ついに、1888年4月に向こう一年間の出社を停止するという形で、事実上の辞職勧告をつきつける。最終的

にウェブスターの持ち株をトウェインが買い取ることで、ようやくこの厄介者を追い払うことができた。

だが、すでに時は遅すぎた。経営状態は予想以上に悪化していたのである。それに、ウェブスターを辞めさせてみると、例の横領事件以外にも、いろいろな不始末が明るみに出てきた。まず、グラント將軍の遺族に払うべき印税が十万ドルほど少ないというのである。グラントの遺族が雇った会計士が計算しなおした結果、それが判明した。また、予約出版の販売代理店からウェブスター社に支払われるはずの金の一部も入金されていないというのである。これも誰の懐に入ったのかはわからずじまいだった。

トウェインも、ウェブスターのあとを引き継いだフレッド・ホールも、経営の立て直しに全力をそそいだが、形勢を挽回することはできず、善戦むなしく1894年4月にウェブスター社は多額の負債をかかえて倒産する。

### (三) 投機に走るトウェイン

トウェインがかかえていた財政上の問題はこればかりではなかった。ウェブスター社の経営で悪戦苦闘していたこの時期に、ほぼ平行して投資にも多額の金をつぎ込んでいた。どうも、この時期のトウェインの行動は正気とは思えないものがある。依然として、株には常軌を逸した額の金をつぎ込んでいたし、発明にも執着していた。

十九世紀後半から二十世紀初頭は、アメリカでもヨーロッパでも人々が発明に熱狂した時代で、あのトマス・エジソン(1847-1931)が活躍したのもこの頃である。電話、ミシン、蓄音機、白熱電灯、映画、飛行機、自動車はすべて十九世紀末から二十世紀初頭の二、三十年の間に発明されている。トウェインが発明に投資したのも、時代の流れに乗った行為であった。ただ、残念なことに、彼が投資した企画はほとんどすべてが空振りに終わっている。

トウェインが投資した最大のプロジェクトは、ジェイムズ・ペイジの植字機の開発であった。この開発に対するトウェインの肩入れは並のものではない。こればかりでなく、1880年代から90年代初頭にかけてのトウェインの投資には、いささか異常とも思えるものがある。勝負にのめり込む賭博常習者のような印象をうける。これ以上金をつぎ込めば身の破滅だとわかっているにもかかわらず、歯止めをかけるこ

とができず、有り金残らず、あるいは人から借りてまで賭けずにはいられないのと同じような精神状態なのであろうか。これに拍車をかけたのは、前述したグラントの『回想記』の成功であった。一時的にウェブスター社も潤い、順風満帆の勢いだったトウェインのもとに、数々の出資依頼が舞い込む状態が続き、一時彼はこの世界でいいカモにされていた。

ページ植字機でも、製作者のジェイムズ・ページの言いなりに出資している。開発の途中でページが新たに提示した契約書には、トウェインの出資額の上限が明記されていなかった。さすがに、相談をうけた友人もその契約書には署名をしないように忠告するのだが、トウェインは有望なこの発明をいまさら他者に横取りされたくなかったのか、署名してしまう。これが実用化されれば、トウェインの財布にも五十万ドルという大金がころがりこんでくるのだ。二万ドル、三万ドルという金もたいした金額には思えなかったのだろう。

結論から先に言うと、この発明は失敗に終わった。開発にあまりの時間と費用がかかりすぎたのである。その理由の一つは、開発者ページの性格によるものであった。彼にはよく言えば職人気質、悪く言うと偏執的な一面があり、この植字機の試作の過程でも改良に改良をかさねていた。実際、トウェインに出資を誘われた人々が彼の制作現場を視察に訪れたが、そのあまりのこだわりぶりにあきれて出資をことわったほどである。

そのようにページが細部にこだわっている間に、競争相手の「ライノタイプ」が先に実用化されてしまう。ページ植字機もほぼ完成していたのだが、いくつかの点でライノタイプのほうがまさっていた。機械そのものが簡略化されていて、したがって操作が簡単で、しかも値段が安かった。さらに、決定的だったのは、ライノタイプには開発の段階からいくつかの新聞社が後押ししていて、完成と同時にそれらの新聞社で実際に使われていたことである。勝負は最初からついていたようなものだ。トウェインがページ植字機に投資した金額は二十万ドルとも、あるいはそれ以上とも言われているが、いずれにしても、たいへんな金額である。しかし、トウェインがこの機械から利益を得ることはなかった。最終的に植字機の開発の失敗をトウェインが認めたのは、1894年の秋である。ウェブスター社の倒産と同じ年である。すなわち、トウェインはたてつづけに二つの大きな打撃に見舞われたのである。

#### (四) 救世主ヘンリ・ロジャーズ

トウェインは投資と会社経営にいったいどれくらいの金をつかったのだろうか。今となっては、その正確な数字を知ることはできないが、おそらく現在の貨幣価値に換算すると、数百万ドル、日本円で数億円か。もう一桁上ではないだろうか。信憑性のある数字だけを上げておこう。倒産したウェブスター社の負債は7万ドルであった。当時の工場労働者の平均年収が435ドル、女子店員の週休が4ドル、『ニューヨーク・タイムズ』が3セントという時代の7万ドルである。今の金額に換算すると、128万ドルになるという。<sup>4</sup> 日本円にして、一億三千万円を超える大金である。しかし、これ以外にトウェイン個人の負債がある。また、これまでに彼が株の購入や発明への投資につかった金額もはかりしれない。ペイジ植字機だけでも、前述したようにウェブスター社の負債額の三倍以上もの金を費やしている。

身から出た錆とは言え、たてつづけに不幸に見舞われたトウェインは、いよいよ身動きがとれなくなる。だが、万事休すと思われたそのときに、救いの手が差し伸べられる。当時スタンダード石油の副社長にして辣腕の投資家、ヘンリ・ハトルストン・ロジャーズ(1840-1909)である。紹介してくれる人があって、トウェインは藁にもすがる思いでロジャーズに会いに行ったのだが、そのときからロジャーズは経理顧問として、トウェインが立ち直るまで面倒を見てくれることになった。

もちろん、ロジャーズもまったくの善意からトウェインの救済を申し出たわけではない。アメリカでもっとも有名な作家を救うことは、自分のため、ひいては自分の会社の宣伝にもなるという計算の上での支援であった。しかし、もはや孤立無援のトウェインには心強く、ありがたい援軍であった。トウェインもロジャーズが実業の世界では非情な人間であることを知ってはいたが、そのようなことにかまっている余裕はなかった。ここは全面的に依存するしか方法がなかったのである。

ロジャーズも徹底してトウェインを支え、迅速に事後処理をこなしていった。その指導は適切なものであった。まず、ウェブスター社の債権者を集めて(トウェインの『自伝』では96人もいたという)交渉に臨み、トウェインもオリヴィアも同社には金を貸しているのと同じく債権者であること、したがってオリヴィア



名義の自宅は債権者たちの差し押さえの対象にはならないことを納得させる。さらに、負債はトウェインが全額返済すると言っている（負債総額の50パーセントを返せば、返済義務をまぬがれたのだが）、時間の猶予を与えるように債権者全員を説得した。さすがに、この処理のしかたはみごとである。トウェインもロジャーズには大いに感謝している。自分に関わった人々に対する悪口に満ちているあの『自伝』でも、ロジャーズのことだけは悪く書いていない。本心かどうかはわからないが、その人柄を手放しで賞賛している。

こうして、一応破産をまぬがれたものの、トウェインは債権者たちに7万ドルの負債を支払わねばならなかった。印税で返すと言っても、それほど簡単に多額の印税が得られるほどの作品が書けるわけではない。驚いたことに、トウェインはこの時点でも、作品を書いていたのである。現に、この年の12月には『間抜けのウィルソンとかの異形の双生児』をアメリカン・パブリッシング社から出版しているし、『ジャンヌ・ダルク』（1896）も雑誌に連載していた。しかし、どちらも莫大な印税を期待できるような作品ではなかった。

結局、トウェインはロジャーズの助言を入れて、手っ取り早く収入が得られる方法、すなわち講演という手段を選んだ。それも、アメリカ国内だけでは得られる金額に限度があるということで、英語が通じるイギリスの植民地を中心に、世界を一周する講演旅行に出ることになったのである。もう講演は二度とやらないと周囲に宣言して、実際に十年ぐらい遠ざかっていた演壇に、トウェインは再び立つことになった。

## （五）世界一周講演旅行

1895年7月14日午後10時30分、マーク・トウェインはニューヨーク州エルマイラからクリーブランド行きの夜行列車に乗り、世界一周講演旅行のスタートを切った。『赤道に沿って』では、パリが出発点だと言っているが、それは当時トウェイン一家がパリに滞在していたからで、実質上はこの日エルマイラを発ったのがこの旅行の始まりである。

なぜエルマイラからスタートしたかという、ここは一家にとってホームタウンだったからである。このとき彼らの家はコネティカット州のハートフォードにあった。だが、そこは前章で述べた倒産や破産目前までのいやな思い出のしみつ

いたところであった。あの悪夢から逃れるためと、経費を安くあげるためという二つの理由から、一家はヨーロッパへ移り借家暮らしをしていたのである。そのヨーロッパからもどって、一旦落ち着く場所を考えたときに、彼らにはエルマイラしかなかった。

エルマイラは妻オリヴィアの実家ラングドン一族のホームタウンで、オリヴィアの父ジャーヴィスは石炭産業で身代を築き、この町の名士になった人である。トウェインは妻の姉夫婦が住む、この町の郊外のクォーリーファームがひどく気に入っていて、1870年代から80年代の夏はほとんどここで過ごし、いまはエルマイラ・カレッジのキャンパス内に移築されている、あの有名な八角形の書斎で多くの作品を書いた。また、短期間ではあるが、一時トウェイン一家もこの町に住んだことがあって、ここは彼らにとってもホームタウンという意識が強かった。ちなみに、このとき彼らが利用した鉄道の駅はエリー駅だが、これは今はない。鉄道そのものが廃線になってしまった。

今回の講演旅行に同行するのは妻オリヴィアと次女クララの二人で、アメリカ国内だけは、公演のプロモーター役のポンド少佐とその妻が同行している。このとき、トウェインはあと四ヵ月ほどで60歳を迎えるところであった。当時としては、かなりの高齢者と言っていいだろう。相当の苦難が予想される旅である。その上、このときトウェインは足にひどいできものができていて、歩行が困難であった。ミネソタ州クルックストンで列車を待つトウェイン一行をクララが撮った写真が残っているが、それには荷物運搬用の台車に乗せられたトウェインが写っている。彼の悲痛なほどの決意が伝わってくる写真である。

アメリカとカナダだけでも、二十二の会場で講演をこなし、8月23日にトウェイン一行はカナダのヴィクトリアから出航した。これから先の主な訪問先はハワイ、フィジー、ニューカレドニア、オーストラリア、ニュージーランド、セイロン、インド、南アフリカと、どれもイギリスの植民地か、もしくはその支配下にある地域だった。

最初の訪問先はハワイのホノルルであった。若き日に四ヵ月ほどこの地に滞在して、のちに『ハワイ通信』になる記事を書いたトウェインにとって、なつかしいところである。三十年ぶりのハワイ再訪を楽しみにしていたのだが、上陸することはできなかった。ホノルル市内にコレラが発生していて、上陸許可が下りな

かったのである。トウェインの落胆ぶりは大きかった。結局、沖合に一晩停泊しただけで、船はホノルルを離れ、南太平洋の島々を経由し、オーストラリアに向かう。

その最初に寄ったフィジーやニューカレドニアで、トウェインはすでに帝国主義の弊害を垣間見ている。島民が、オーストラリア東海岸のプランテーションに、労働力として強引に連行され、搾取されている実体を明らかにし、表向きは労働者募集などと言っているが、現実には奴隷狩りと変わらないのだと痛烈に批判している。

『赤道に沿って』は前半がオーストラリア、後半はインドがそれぞれ中心になっていて、この二つの国の記述だけでこの本全体の七、八割を占めている。まず、オーストラリアに関しては、その歴史から始まって、動物や先住民の話などさまざまなエピソードを紹介している。

オーストラリアは1770年にキャプテン・クックことジェームズ・クック(1728-79)が上陸したことによって、歴史に登場するようになったが、初めはイギリスの流刑地であった。1788年にフォート・ジャクソン(現在のシドニー)にイギリスから最初の流刑囚が送り込まれ、そのわずか五年後には自由移民が移住している。その後、アメリカのカリフォルニアと同じように、ここでも急激な人口増加をもたらしたのは、ゴールド・ラッシュであった。

ゴールド・ラッシュによって、一気にヨーロッパから白人が流入してくると、先住民のアボリジニは迫害される。トウェインの目はその残酷な実態に向けられる。いかに卑劣な手段で、白人が彼ら先住民を迫害したり殺したりしたかを具体的にこの本のなかで語っている。さすがに、トウェインが訪れた頃には、そのような悲惨な事件はすでに過去のものとなっていたが、白人の先住民に対する差別は終わっていない。

この本の後半で、トウェインはインドについて多くの章をさいているが、印象に残る話題は二つである。一つは、古くからインドに存在する凶悪な強盗殺人集団による凄惨な犯罪の実態である。トウェインは幼い頃に、本で彼らの存在を知り、遠く離れた東洋の地にそのような非現実的とも思えるような事件が起こっているということに、大いに想像力を刺激されたようである。そして、じっさいにインドに来て、彼らに関する資料を熱心に読み、われわれ読者に紹介してくれた

のだ。たいへん興味深い話題である。

もう一つの話は、インドを統治しているイギリス軍に対するインド人傭兵の武装蜂起、すなわちインド大反乱(1857-59)である。これもイギリスの帝国主義がもたらした悲劇である。ただし、ここでは、トウェインの筆はインド人傭兵すなわちセポイに対して批判的である。少数のイギリス軍とその家族に対するセポイの攻撃があまりにも卑劣で残虐だというのである。しかし、これは説得力に欠ける。セポイの残虐行為を非難する前に、やはりなぜそこにイギリス軍がいたのかということが問題にされるべきであろう。『赤道に沿って』は帝国主義批判の書だと言われている。<sup>5</sup> そのことに異存はないのだが、ただこのインド大反乱の記述に関しては、トウェインは本来非難の対象となるはずの帝国主義の尖兵ではなく、抑圧の果てにやむにやまれず蜂起したセポイを批判しているのである。ここでは正義漢のトウェインが前面に出てしまっている。セポイが非戦闘員である女性や子供まで殺してしまったことが、トウェインには許せなかったのである。

インドをあとにしたトウェインは、インド洋を航海して、南アフリカに向かう。この当時の南アフリカはすでにボーア戦争の前哨戦ともいべき紛争の舞台となっていた。南アフリカは金とダイヤモンドという富に直結する鉱物を産する地域だけに、その利権を獲得するため、イギリス人とオランダ系移民ボーア人との間で熾烈な争いが展開されていた。ここでもやはり白人優位は絶対で、もともとこの地に住んでいる人々は抑圧され、利権どころではなく、その争いに口をはさむことすらできなかった。

結局、トウェインがこの世界一周講演旅行で見たものは、帝国主義の現実であった。この旅行で彼の帝国主義嫌いは決定的なものになった。例えば、トウェインはいつも彼をあたたく迎えてくれるイギリスが好きで、この旅行の後もロンドンに住んで、『赤道に沿って』の原稿を書くのだが、イギリスに対する彼の姿勢も微妙なものになってくる。だが、それでもイギリスをまともに批判するようなことはせず、批判の対象となったのは母国アメリカであった。当時のアメリカは、キューバの独立をめぐるスペインと戦争し、プエルトリコを占領し、さらにはハワイを併合した後、フィリピンのマニラも占領するといった、いわば帝国主義への道をひたすら突き進んでいたのである。トウェインはウィリアム・ジェイムズらとともに、反帝国主義者同盟に加わり、ますますアメリカに対する批判を強

めて行く。

もはや紙数が尽きた。最後に、トウエインの負債はどうなったかを記しておきたい。トウエインは講演の報酬と『赤道に沿って』の印税で、あの膨大な負債を全額返済したのである。だが、『赤道に沿って』をロンドンで執筆中に、アメリカに残っていた長女のスージーが病気で亡くなるという悲運に見舞われた。トウエインは執筆に没頭することでその悲しみをまぎらし、やっとのことで完成にこぎつける。この本には最後までドラマがつきまとった。

(注)

1. Emerson, Everett. *Mark Twain—A Literary Life*. (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2000) pp.124—126.
2. Hoffman, Andrew. *Inventing Mark Twain*. (London: Weidenfeld & Nicolson, 1997) p.328.
3. *Inventing Mark Twain*. p.328.
4. Cooper, Robert. *Around The World With Mark Twain*. (New York: Arcade Publishing, 2000) p.25.
5. Kaplan, Fred. “Afterword” of *Following the Equator*. (New York, Oxford: Oxford University Press, 1996).

(その他の参考文献)

1. Twain, Mark. *Following the Equator*. (New York, Oxford: Oxford University Press, 1996). (飯塚英一訳『赤道に沿って 上』、彩流社、1999。  
飯塚英一訳『赤道に沿って 下』、彩流社、2000)
2. Neider, Charles ed. *The Autobiography of Mark Twain*. (New York: Harper & Brothers, 1959).
3. Kaplan, Justin. *Mr. Clemens and Mark Twain*. (New York: Simon And Schuster, 1966).